

第69回「資本論を読む会」

(第1巻終了ー第2巻に突入ー新しい参加者歓迎します!)

2024年/11月学習会の

案内

11月26日(火曜日)

午後6時30分ーZoom開催

資本論 第2巻の序文[岩波文庫(四)].

10月29日の「資本論を読む会」はほぼ現在のフルメンバー11名(田3酒2杉櫛海加佐中)が参加して、第1巻を終えることができました。レポーターはKatoちゃん。延べの参加者は15名くらいになるはずですが、皆さん長い間ご苦勞様でした。

相談の結果、次回からは淡々と第2巻に入ることにしました。第2巻からは「市場を舞台にした資本主義分析に入る」との評がありましたが、再スタートです。

序文を座長のTabeさんが担当します。これを機会に、新しい参加者も歓迎します。身近な誰かにご連絡下さい。

心機一転、一緒にやってみませんか? 資本論を読み続けるのは、とにかく“根気”ですね。2018年9月に第1回開始から、コロナ禍をくぐって、ズームで再開して68回、6年2カ月かかりました。

K.Marxさんから「修了証書」が届きましたので掲載しておきます。※日本語訳です

さて10月の「読む会」は「第25章近代植民理論」をやりました。植民地は古代、封建制の時代からありますが、時代ごとにその位相が変わります。マルクスが「ここで論ぜられるのは、真の意味の植民地、すなわち自由な移住者によって植民される処女地である。」(p418)で始まります。同じ植民地でも、アメリカとオーストラリア等とは「植民地の状態」が異なるのですが、「われわれが関心をもつのは…新世界で発見され、声高く宣言された秘密だけである。」「資本主義的生産様式と蓄積様式は、したがってまた資本主義的私有は、自己の労働にもとづく私有の破壊、すなわち労働者の収奪を条件としている。」(p433)との文章が、第2巻の最後のしめくりでした。

さて終わってからの懇親会は、やはり「自公過半数割れ」となった総選挙総括で白熱。JP職場の問題から「公営-私企業の在り方」などについても議論が及び、遅くに解散となりました。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/> 「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから-Katoちゃん

第25章 近代植民理論

- ・ここで言う植民地とは、アメリカ等自由人が移住して開拓された処女地である
- ・経済学者ウェイクフィールドは、植民地に資本主義を植え付ける「組織的植民」論を提唱した。それは、資本家が植民地に貨幣、生産手段、生活手段を持ってくるまでも労働者がいなければ資本活動が出来ない。移住労働者は、働いてすぐに廉価な土地購入し個人経営者になるため、労働者確保が困難である。ならば地代を高価にし、長年働かせ土地を購入したら、その地代を基に、移民を受ける。
- ・このウェイクフィールドの理論を長年イギリス政府が実行してきたが、移民の流れがイギリスの諸植民地からアメリカに代えられたにすぎず、資本主義生産の進歩と政府の圧迫の増大で、植民地用「本源的蓄積」論は不用となった。
- ・アメリカへの膨大な量の移民流入が、東部へ集中し労働市場が滞留、また、アメリカ南北戦争は、国に膨大な借金と税の引上げをもたらし、さらに、金融貴族、山師会社への巨大公有地の寄贈等により急激な資本の集中を生じさせ、資本主義的生産が発展し始めた。
- ・この章では植民地の状態を論ずるのではなく、旧世界の経済学が新世界において発見し公言している秘密である。それは、資本主義的生産と蓄積の様式が、また、資本主義的私有は自己の労働による私的所有を破壊、つまり、労働者の財産収奪を条件としている。

Abschlusszertifikat

Herzlichen Glückwunsch,
dass Sie Band 1 von
Das Kapital zu Ende
gelesen haben



29. Oktober 2024
Leserkreis Das Kapital

K.Marx

※「修了証書」。
あなたは、資本論の第1巻を
読み終えたことを賞します。
2024年10月29日